

(資料)

資料・自分と、誰かのために

— 自死遺児たちの分かちあいの会の経験から — (上)

Experience at a Self-Help Group
— Cases of Suicide Orphans — (1)

時 岡 新

Arata TOKIOKA

本稿と次稿（本誌次号に投稿予定）は、2002年3月から9月にかけて筆者がおこなったインタビュー記録に、最小限の註記をくわえた資料である。語り手は、遺児たちの進学を支援するある奨学団体がおこなった催し（遺児たちの「つどい」）の参加者であり、おもに父親が自死によって他界した遺児たちに多くを聞いた。

以下に報告するかれらの体験や心情の語りのうち、いくらかは、すでに筆者が複数の論考で紹介し、吟味している。しかし、いずれも、とくに自死遺児に照準するというインタビュー本来の目的よりもひろく、遺児全体の語りのなかに適宜、位置づけられたものである。そのため、各論考における扱いに不足はないというものの、自死遺児による語りの全体を知るためには断片的に過ぎたり、個別の経緯をじゅうぶんに追うことは困難な状態であった。本資料はそれらを回復し、自死遺児へのインタビューという直接の趣旨にそくして編集したものである。なお、本稿の草稿はインタビューの直後に作成され、今回、その後の刊行物や筆者の論考をふまえて註記を補充した。

いま、本稿を資料という状態にとどめたま

ま提出するねらいは、おおよそ次のとおりである。周知のごとく、2006年の半ばに議員立法の手続きを経て「自殺対策基本法」（平成18年6月21日法律第85号）が成立、その後、施行された。同法は第18条に「自殺者の親族等に対する支援」をかけた、「国及び地方公共団体は、自殺又は自殺未遂が自殺者又は自殺未遂者の親族等に及ぼす深刻な心理的影響が緩和されるよう、当該親族等に対する適切な支援を行うために必要な施策を講ずるものとする」と定める。議案提出の経緯をわずなかりと知る筆者には、この条文こそが数年来の諸活動の果実であり、またじゅうぶんに達成されるべき課題であると判ぜられている。数年来の諸活動とは、たとえば同法第19条（「国及び地方公共団体は、民間の団体が行う自殺の防止等に関する活動を支援するために必要な施策を講ずるものとする」）にいわれる「民間団体の活動」を意味するが、そのひとつにこそ、本稿で訊く自死遺児たちの試みがある。

かれらは自らの死別体験を語りあうとともに、ひろく社会一般にむけて自死遺児、遺族のおかれた状況や心情をしらせ、理解をもとめてきた。本稿のインタビューでも紹介され

るそうした活動は、遺児たちのどのような経験や判断にもとづくものであったか。手記集の公刊に参加し、あるいは陳情に同行した遺児たちに訊いた本稿は、少なくとも、考察の手がかりにいたる道しるべにはなり得るであろう。

もちろん、自死遺児たちへのインタビューは、直接には遺児どうしの語りあい、分かちあいの解析を企図したものであった。それゆえ、先にふれた既出の論考にインタビューで得られたデータの一部を用いたのである。しかし今日、前々段に述べた社会的状況をふまえ、あらたな視点から遺児たちの語りを解釈することができる。そうした作業を開始するに先立ち、初発の企図にそってまとめられた原資料を公表し、二次的な使用に際してゆるされない恣意の混入をあらかじめ防ぎたい。以上、本稿に「資料」の文字を冠し、またできるかぎり草稿の状態を保ったまま提出するゆえんを申し述べた。

そのようなわけで、早速にも「はじめに」の書き出しについて断りを記さなければならぬ。インタビュー当時、調査対象となった遺児たちの「つどい」では、しだいに増える自死遺児たちへの関心と理解がふかまり、病気や災害で父親、母親の他界した遺児たちとは別に、自死遺児だけの語りあいの機会が設けられるに至っていた。インタビューははじめに、そこに集った自死遺児のふたり（CさんとS君）に請うておこない、続いてかれらも参加した遺児全体による「つどい」の参加者（F君やN君など）へのインタビューにすすんだ。本稿草稿はそれらの経緯すべてに必ずるかたちで構成されており、お申し出をいただいたばあいにはそのままのかたちで協力くださった方々に提出したのである。先述のねらいとは別に、このような事情からも、以下では、必要のかぎり註記を補充するほか大

きな修正を控えるよう努めた。当事者諸氏に一読いただいた稿を改変することにつよく躊躇したためである。

また併せて、前段のとおり、ごく一部とはいえ読み手に難解な箇所が残るゆえんを説明し、あらかじめの容赦を願うものである。遺児たちの「つどい」や遺児による語りあいの詳細については、それを主題とした拙稿をご高覧賜りたい。本稿はまたそれらの、遅ればせの資料開示の一環でもある。

なお、稿を二つに分けたのは、ゆるされた紙幅の制約による。本稿（上）では、自死遺児Cさんによる語りを基軸にして、彼女たちがくり返しつかう“おなじ”の語りに注目しながら訊く。おなじ遺児どうし、おなじ自死遺児どうしが出会い語ることで、彼女たちのなかに醸成された心情とは何かを考える。また次稿（下）では、おもに自死遺児S君に訊きながら、遺児どうしの出会い、語りあいがやがて、他界した故人への心情を変化、醸成させるさまをみる。読み手のなかに、それらのいずれもが先に紹介した「法」の精神に連なるとの諒解がうまれるならば、筆者のこのうえない喜びである。

以下、資料本文¹⁾。

はじめに

ある日とつぜん、自死遺児たちが集まったのではない。

その源泉をくわしく辿れば1961年、ある一通の投書にいきつくけれども、ここではやや時代をくだり、交通遺児作文集『あしながおじさん物語』（1985年）の紹介からはじめたい²⁾。交通遺児育英会は、発足直後の1970年から毎年、奨学生の「つどい」を実施していた。そこにはおもに交通遺児が集まってくるのだが、なかには自死で親の他界した者もい

たのである。

私は、交通遺児育英会でもたぶん人数が少ないと思いますが、両親ともにいない子です。この奨学金がうけられるようになったのは母の死からでした。その前に、もう私には父がいませんでした。そうすると、みんな「どうして死んでしまったの」と聞きます。

私は、この「つどい」にくるまでは「心臓マヒで」といってごまかしてきました。私は父が自殺したということ、どうしても言えませんでした。なにしろ、親がいないというだけでも、変な目で見られる人たちにこれ以上、好奇の目で見られたくないという気持ちがあったのです。

私は、高校一年の九月にこの奨学制度のあることを知ったため、二年になってはじめてつどいに参加しました。不安がいっぱいでした。『同行者希望』というのをだしたのに、近くにだれもいなくて心細く、何度もひき返そうかとも思いました。

しかし、あの帰りのわかれづらい気持ちは何とも言えません。最初行くのがいやだったのが、うそみたいです。その楽しかったつどいのなかの「自分史」で、みんな、父親が死んだときのことを、うそいつわりなく、はっきりと話してくれました。

私は、その時もまた変な目でみられてしまうのかと思い、父は病死したと言ってしまおうと考えていたのです。しかし、みんな泣きながら本心を話してくれるのをきいて、私だけが体面ばかり気にして、うそを言おうとしていることが、だんだんはずかしくなってきました。変な目で見られてもいいから、本当のことを言おうと思ひ、自分の番がきた時にそうしました。

するとどうでしょう。みんなは変な目で

みるどころか、私のことをはげましてさえくれたのです。あの時ほど、この交通遺児が「仲間」だと思ったことはありません。

作文の書かれた1980年代後半以降、時代の変化やあしなが育英会の発足を経て、「つどい」の基調やプログラムはさまざまに変化してきたが、死別体験や日々の生活を話す「自分史」語りの時間は長く変わらず、その中核におかれつづけている。

筆者も参画しておこなわれた奨学生経験者にたいする調査には、「つどい」を『話せる場』、『聞いてもらえる場』、『話しても皆の態度が変わらない』場であるとの回答を寄せたものが少なくない。上に紹介した作文もまた、そのような感想のひとつとみることができる。

そう評される「つどい」のなかで、しかし誰もが、私の父親、母親は自死しましたと話したわけではない。自死で親の他界した参加者は、たしかにいた。しかし必ずしも、そうと言ってはこなかった。読み手のなかには筆者とおなじく、それはそうだろうと思われる方も少なくないはずだ。ならば、あらためて聞きたい。かれらが話さなかったのは、なぜか。そうして、いっそう深く考えたい。話しはじめたのは、なぜか。

本稿は、それらを知ろうとする試みの、わずかな一歩である。

1. 聞いてくれてうれしかった、でも。

筆者が高校奨学生の「つどい」に参加の機会をえたのは99年、夏。前年に全国の自殺者が3万人を超えたと報じられ、秋の「あしなが学生募金」で自死遺児支援がよびかけられると決まった頃である³⁾。

この年に実施された「つどい参加体験アンケート」の回答者は大学生、高校生あわせて1342人。質問、リーダーや班仲間の「自分を

語ろう」を聞いたり、あなた自身がしゃべって、つぎのようなことを感じましたか。『つらいのは自分だけでない、同じような体験をした仲間がいるという気持ち』…強く感じた859人、感じた410人、感じない46人。これから訊く遺児、奨学生たちのいく人かも、これらのなかに含まれている。

Cさんは当時、高校2年生。初めての「つどい」参加だった。

Cさん「つどいに行ったのは高校2年生、奨学生になったのが2年生から。なんかね、1年生の時にも〔奨学金を〕受けようとしたんだけど、願書に死因とかいろいろ書かなきゃいけないじゃん。それがお母さんのすごい嫌だったみたい。あしなが〔育英会〕を知ってから、しばらくは考えたんだろうね。それで私が〔高校卒業後は〕進学したいとか言い出したから、金かかるじゃんね。貯金とかもあったんだけど、お母さんの老後のこともあるじゃん。じゃあ〔高校生のうちから奨学金を〕受けよう、みたいなかんじで受けたわけです。私は、受けたよみたいな話を聞いたのか聞かなかったのか覚えてないくらいなんだけど。で、葉書かなにかがきて『つどいに来てください』って。絶対行きたくないじゃん。正当な理由がないかぎり休めませんかとか書いてあるじゃん。担任の印鑑が要る、みたいな。担任にさ、ホント行きたくないんだけどどうやったら休めると思う？とか相談して。部活の公式戦とか書いときゃいいんじゃないの？とか言われて、そうだよねとか言って。なんで行こうと思ったのかもあんまり覚えてないんだけど。ま、行こうかなと思っ

て、行ったんだよね」。

Cさんは、多くの遺児を知った。が、しかし。「その年のつどいは、私にとっては、あんまり〔よくない〕、だった。同じ班に自死遺児の子がいなかったの。だから、なんか私ってちがうな、と思って。で、〔育英会職員の〕GT先生がね、〔「つどい」最後の夜に催された〕キャンプファイアーの時にね、みんなのお父さんは死にたくて死んだんじゃない、って言ったの。それ聞いて、ここは私の居場所じゃないと思ったの」。でもね、と彼女は、文字どおり間髪をいれずつづけた。読み手には、どうかそれを強く心にとどめながらも、しばらくCさんの「ここにいちゃいけないな」という気持ちの細部について思いを巡らせてもらいたい。

筆者、そう思ったのはなぜ？ Cさん「それは、みんなのお父さんは死にたくて死んだんじゃないっていうのを、〔職員の言葉を〕聞いて思ったわけ。みんなのお父さんはしょうがないじゃん、事故とか病気でさ、死にたくないのに死んだじゃん。でも〔私の〕お父さんは自殺して、死を求めて死んでいったから、そんなこと思ってなかっただろうな、と思ったのね。みんな泣いてたの、GT先生がそうやって言って。でも私は泣けなくて。ああ、私はここにいちゃいけないんだ、と思った。ちがうな、って思って」。

聴き取りをすすめる前に、ここで「みんなのお父さん（あるいはお母さん）」について確認しておかなければならない。あしなが育英会から奨学金を借りる自死遺児の数は、この数年で急増している。しかしだからといって、奨学生にしめる自死遺児の割合がじゅうぶんに大きいというわけではない。たとえば01年の「つどい」参加者についてみると、大学生、高校生あわせて1525人の内訳は、ガン

遺児501人、ガン以外の病気遺児423人などにたいし、自死遺児は95人である（ただし「アンケート」への回答による⁴⁾）。まして99年の自死遺児奨学生は01年のおおよそ半数。延べ10会場の「つどい」で自死遺児どうしが出会う機会は、ごくわずかであったと推測される。Cさんのばあい、はじめての「つどい」ではほかの自死遺児と話すことはなかった。

奨学生のなかには、現在に続く奨学制度が充足した88年からすでに自死遺児がいた。しかしかれらは災害遺児の名目で採用されている。自死遺児支援をそれとして、はっきりと打ち出したのが99年、秋。Cさんが自死遺児と出会えなかったのも不思議でなければ、病気、災害遺児たちが自死遺児を知らなかったのも当然のことである。

高校生の「つどい」に自死遺児を班員としてむかえたシニアリーダーA君（大学2年）は、かれらの自分史を聞いて、次のように感じたという。

A君「すごい経験をしてるんだなあと思います。病気遺児とはぜんぜん違う体験をしているっていうのがすごく印象に残っています、僕のなかでは。病気遺児のばあいは、たとえば僕はガン遺児なんですけれども、ガンっていうことで、〔他界した父親は〕ベッドのなかで治療を受けて、治療が及ばずに亡くなるっていうことなんですけれども、自死遺児のばあいは、首を吊って亡くなっている親を見る〔などの場合もある〕っていうことで、ショックがぜんぜん違うと思うんですよ。〔中略〕それから、自殺で亡くなったっていうのは分かっているんですけども、なぜ自殺に至ったかっていうのを、そのはっきりした、納得いける理由を話してくれ

なかったんですね、その班員が。『お父さんが小さなケガをして、しばらく仕事ができなかった。それが原因だ』みたいに話してくれて。けれども、それはちょっと、僕〔に〕は理解できなくて。〔中略、これ以上くわしくは話しませんけれども〕、それが本当に自殺の理由になるのかっていうのがすごい引っかけかまして。やっぱり〔自分と班員は〕会ってそんなに経ってないわけだから、そんなことが言えるわけじゃないと思うんですけども⁵⁾。

A君は病気遺児だから自死遺児を理解できない。そう考えるのはあまり妥当でない。同じ班では自死遺児であるB君（大学1年）がリーダーを務めていたのだが、動揺はむしろB君に大きかった。A君「B君はやっぱり原因を〔知りたがった〕。自分〔B君〕は〔かれ自身の父親の自死の原因を〕母親から訊いて知った、と。それで原因は、原因は、原因は、って、もう〔班員の父親について、自死の〕原因のことばかり気にしていて」。筆者の聞いた自死遺児たちの経験から推察するに、おそらくB君は、じゅうぶんに安心して父親の死を考える機会を得ていなかったのではないか。母親の話してくれた理由は、分かるけれども、納得できない。そのような気持ちだが、やがて、班員の自死した父親についてさえその理由をハッキリさせたいという気持ちにつながったとみることができる⁶⁾。

病気遺児も災害遺児も、そして自死遺児さえもが、（ほかの）自死遺児たちとのつながり方を模索していた。そうした状況もあってか、班員として「つどい」に参加する自死遺児たちは、父親、母親の他界について必ずしも多くを語らなかった。

大学奨学生の「つどい」に自死遺児を班員

としてむかえたシニアリーダーD君の声を聴こう。班員は大学一年生約20人ほど、育英会職員（おやじさん）1人、三年生以上のシニアリーダー2人、二年生のリーダー3人。班員の多くは病氣遺児であり、「つどい」期間中、父親を自死で亡くしたと話したのは1人だけだった。D君「自分史の時間、E君は死因のところだけ『突然死』、たしか心筋梗塞と言っていました。そのほかの気持ちにはいつわりがない、突然父親が亡くなって感じたいろいろなことについて、自分の感じたことをそのまま、自分史で吐き出して話していたというふうに思います」⁷⁾。

大学生の「つどい」では、ゆっくりと時間をかけてメンバーがうちとけた後、三日目になってようやく「自分史」を話すプログラムに入る。班を二つに分け、はじめにリーダーが、つづいて班員が話す。ある者は「僕のお父さんは、ガンでなくなりました」の一言を口に出すために、またある者はつらい経験や気持ちを思いだして、激しい感情の高ぶりをみせることもある。おやじさんとシニアリーダーは、当日から、次の日も、またその次の日も、折りをみて班員たちに話しかけ、かれらを支える。とりわけフェイス・トゥ・フェイスといって、班員と二人きりで話す機会が重要である。

D君「E君が僕に〔父親が自死であることを〕話してくれた経緯はこうです。自分史の時間がおわって二日後に、フェイス・トゥ・フェイスをすることになりました。シニアとおやじさんとで分担し、僕はかれの担当になりました。僕はかれとすこし話がしたいなというふうに思っていたんです。自分史の次の日にかれと二人になる機会があったんですね。その時に、とくに意識はし

てなかったんですけど、自分史のときの感想などを聞こうと思ったんです。〔そこで〕かれがなにか言いたそうな表情をしていたのがとても印象的だったんです。〔中略、しかし別の班員もやってきて話は中断された〕、そこでフェイス・トゥ・フェイスの機会を活かしたわけです。〔中略〕はじめは世間話から入って、自分史の時間などを経て、班員がみんな仲良くなったねといった話をしました。それから少しずつ、話題を昨日の話にもっていきました。自分史の感想をきいて、〔死別の体験を〕もう一度大ざっぱでいいから話してくれる？ というふうに訊きました。はじめかれは、やはり死因だけはいつわり、というか、いつわりの自分史を語ってくれたわけです。もちろん、そのとき感じたことなどは話してくれて、死因だけ隠していた、そういう自分史を話してくれました。僕はその、かれの表情が気になったんだと思うんですよ。亡くなったのが最近で、16歳のときに亡くしたと。そのときの様子をくわしく訊きたいなということで、問いかけをしていったんですね。そういう話をしていくなかで、はじめて『ぼく、じつは…』ってことになりまして。父親は自殺だったんです、ということ打ち明けてくれました。／かれの話を聞いているなかで、印象的なことがいくつかありました。僕が問いかけをしたんですね。父親が死んで変わったこと、あるかな。僕なんか親戚から責められたとか、母親に親戚からの風当たりが強くなったんだけど、というような話をすると、『そうなんですそうなんです、ぼくもそう

なんですよ』っていうふうに、すごい饒舌になったりして、『やっぱりそれがものすごい腹が立つ』と。もう一つ感情が高ぶっていたという点では、ほんとうに自責の念が強いというふうに感じますね。『ぼくがあの時なにかねぎらってあげたら』とか、そういうことをしきりに言うんですよ。僕は、そんなことないよ、そんなことないよっていうふうに聴いていたんですけど、やっぱり『ぼくがあの時どうしていれば』っていうことを、すごい強く言っていました⁸⁾。

筆者、E君の話聞いて、どう感じましたか。D君「かれが自死遺児だということをはじめて聞いたとき、ですか？ ああ、ここにもいたんだな、っていう感じですね。僕は、これは自信をもって言えるんですけど、とくにエッという顔をしたわけではないし、心のなかで動揺していたこともまったくなかったです。ここにもいたんだ、というふうで、もっと聞きたいというか」。筆者、では、かれはどうだったんでしょう。「かれの方がどう思ったかということですか？ うん、僕が感じた、僕とかれの共感できる部分っていうのは、あの場ではきっと親戚のことですね。僕はガン遺児ですけど、自責の念はなくはないですけども、それほど強くない。ので、そこは共感に至ってないというか。あの場では親戚にひどい扱いをうけたと感じていることについて、ですね。僕が最初に、親戚が、火葬場で、こんなふうだったんだってことをかれに伝えた時に、もう途端に『そうそうそう、そうだよねぇ』っていうふうに、感情があらわになったなあって思います。あの時のかれの表情は印象的でしたね。それで、かれも、死因は違うけど共感してくれたんだなあとい

うふうに思いました」。

D君の問いかけは、父親の他界を話したE君に、どのように届いたのだろうか。それを直接に知るすべはないが、いくつかの手がかりはある。D君「話をおわった後に、すごいすっきりした、聴いてくれてありがとう、というふうに言ってくれました」。また、その夜、つまり「つどい」最後の夜には、スタンツ大会、キャンプファイアーにつづいて班ごとに缶トーチを囲む時間があった。E君はそこで、「じつは、みんなに言いたいことがある。聴いてほしいことがある、ぼくのお父さんは自殺で亡くなったんだ」と話した。

もちろん、E君にとって、父親の死因を話すことが最善であったかどうかは、分からない。D君「僕がフェイス・トゥ・フェイスをしなくても、かれは、もしかしたら話してくれたのかなあとも思います。かれの性格から考えると、みんなも話してくれたし、自分も言わなきゃなあという気持ちが強かったのかなあとも思います」。筆者、あなたでない別のリーダーであっても話したでしょうか。「かれだったら、こちら側が本気で話していればなんらかの気持ちが湧いて、話してくれていたような気もしますけど、うん…。かれが〔参加者どうしが交換する〕色紙を書িয়েくれましたよね、それが印象的だったんですけど。ひとことで言うと、僕のことをほめてくれたっていうか、で、『聴いてくれてありがとう』と。『あなたの聴いてくれている姿勢がよかったよ、聴き方とか雰囲気は安心できるんです』っていうふうに書いてくれたんですね。それが僕の雰囲気というか、ある程度意識してやったつもりもあるし、僕の努力の結果なのかなあというふうには思うんですけども。自分史の時間にかれは、死因にかんしてはうそを言っていたと考えると、どうだったんだろうかなあとも思いますね。もう一人の

シニアリーダーと、おやじさんになら、話してくれたと思いますよ。かれ、言ってたんですけども、おやじさんをすごい信頼してみたい」。

近年の「つどい」では、参加者をいくつかの班に分けるさい、病気、災害といった死別の原因や、親が重度後遺障害者であることなどを考慮する。会場によってはこれを“カテゴリ分け”ともよび、できるだけ似かよった経験をしている者どうしを同じ班にするよう努めている。もちろん人数の制約もあり、また死別の経緯がくわしく知られているわけではないから、会場ごと班ごとに、さまざまの組み合わせとなる。筆者はリーダー、シニアリーダーとの対話から、カテゴリ分けに注目し、それをたいへん重要な課題であると理解してきた。はたして、自死遺児数の増加により、班分けはいつそう注意ぶかくおこなわれるようになった。筆者はそのような経緯をふまえ、同じような経験をしている者どうしの方が話しやすいはずだ、と了解していた。

しかしそれは、さほど妥当でない。上でみたシニアリーダー、リーダーと班員との関係についてもそうであるし、筆者はのちに何度も、複数の「つどい」経験者から類似の指摘をうけることになる。手間をおしまず丁寧にみるべきことは、経験の共有がもたらす心情と参加者どうしとの関係の双方であろう。死因によるカテゴリ分けが重要だとの理解は前者の、自分史語りだけが「つどい」ではない、5泊6日、3泊4日の全日程について考えるべきだとの指摘は後者の、それぞれ一側面を言いあてている⁹⁾。

本稿でその声を訊く遺児、奨学生たちは誰もみな、これら双方に言及している。そのいづれかを選びまとめる作業はすべて筆者による。

筆者、はじめての「つどい」から時を経た

02年のCさんに訊きます。最近、自死遺児がとくに注目され、対応されていることについてどう思う？

Cさん「私がいちばん最初につどいに来たときに、自死の子がいなかったから、もう来年から行きたくないなあって、ここにいちゃいけないんだなあと思ったじゃんね。そういうのに関連して言うと…。やっぱりさあ、自死〔遺児〕っていうのは孤独感が強いと思うんだよね、分かんないけど。私が病気遺児とかの気持ちが分かるわけじゃないからほんとに推測なんだけどね。孤独感っていうのはすごい強いと思うのね、自死の子って。だからこそ最初は自死の子がいる班に自死の子を入れて、自死のリーダーがいる班に自死の子を入れて、みたいな。そういう対応は、必要だと思うし、うん。でも、そう考えたら、病気遺児は病気遺児で話したりとか、そういうのもすごい必要だなと思うんだけどね。自死遺児だけじゃなくて」。

たしかに、死因の別は遺児、奨学生すべてにかかわる。とくに自死遺児にのみ注目してカテゴリ分けの意義を考えるのは、あまり当をえていないようである。これもまた、話を訊いた誰もがみな、筆者に指摘してくれた。そのうちの一人、N君はこう話す。

N君「とりあえず、親が亡くなるという苦痛は、全遺児にとってすべて同じことだと思っています。最近過労で自殺をする人が多いってことなどで〔社会的に〕注目されていると…。自殺で亡くられる方がいらっしやるから必

然的に、それでお父さんを亡くされる方〔自死遺児〕が出てくるという。それでカテゴリーが、たぶん、できてきたんだと思うんですよ。〔中略、しかし、カテゴリー分けの重視は〕自死遺児だから、とか、そういうのではないと思うんですけどねえ。

ならば、死因の別に遺児たちをグループ分けすることにはどのような意味があるのだろうか、と問う筆者に、N君は「それは、自分の苦しみと他の人の苦しみがちょっと違うからですよ。…でも、それに尽きるんだと思うんですけどね」とつづけた。やや補って言えば、N君は大学生になってはじめて「つどい」に参加し、その後、数回にわたってリーダーやシニアリーダーを務めている。いわゆるカテゴリー分けによって「自死遺児」とされたことはない（「事故死」とされている）。

それでは、N君の言う「ちょっと違う」苦しみとはなにか。そうした苦しみをもつ自死遺児どうしが出会うことによって、どんな気持ちの動きが、変化が、発見があるのか。筆者、自死遺児どうしの語りあい、分かちあう場で、何が起こるのですか。かれは、穏やかな顔でこたえた。

N君「(間)、あの、トッキーさん〔筆者のこと〕、自殺って聞かれて、どうですか。〔いっそう小さな声で〕『僕のお父さん自殺した』、って〔聞かされたとき、どのように感じますか〕」。

訊き手の私にとって、不意をつかれた、それは長い時間だった。正確に言えば、長い時間だったように思われた。どう答えたらいいんだろう。とっさ、あれこれに考えた記憶がある。だから記録テープを聞き返すまで、自

分が即答したことも知らずにいた。私の逡巡は自死のおかれた現在を、筆者とN君、つくろいのない二人のやりとりは「つどい」のありようを、じつに端的に物語っている。

2. いまの私はすごい強い、と思う。

なるほど、いま、自死遺児のおかれた状況があるとして、かれらをそこに立たせているのは我々でもあり、私はその一員である。自死遺児への関心は、じつのところ、私たちの自死（遺児）観の探究にほかならない。筆者の返答、「うん、きっと、あの、目をそらすでしょうね、まず」。N君は間をおかず、つづけた。

N君「はい。で、自死遺児というのはとりあえず、お父さん、お母さんが自殺をしたので、どうしてもそこから目をそらすことができないのですね。で、まずそこから自分のせいになる。僕がもしあの時お父さんの背中を流していたら。お父さんに大丈夫？ と声をかけていたら。そこからまず、自分のせいになって」。

かれは私と話すなかで、何度も、自死遺児だけが特別ではないと言った。病気遺児も災害遺児も、みな感じていることがあると。ここではそれに留意しながら、しかし相対的にみて自死遺児につよくある心情を訊いた¹⁰⁾。

N君「自死遺児って、自分のせいってのがすごく、ばあっと、出てくるんですよ。病気遺児とかでも、お父さん死なないでとあの時ひとこと言えたら。あんなに体にチューブをいろいろ付けられて、どんどん痩せこけて。なぜ僕はお父さんに、反抗期だったから、なに

も声をかけてあげられなかったんだろ
う的なものは、まあちょっとはありま
すけども。

／いちばん印象に残ってるのは、〔お
父さんが〕風呂に入ってきて、恥ずか
しいから出ていったという話なんです
けど。あれも典型的だと思います。自
分のせい。まあ誰かのせいには、たぶ
ん、したいと思うんですよ。自分の大
事なお父さんを亡くされた、自分の目
の前からいなくなってしまった。僕も
実際そうでしたし。それがまわりに、
やり場のないところに、最後の最後に
到達して、自分のところにきちゃうと
思うんですよね。だから、僕だけが自
分のせいにしていたわけじゃないんだ
な、っていうのを結構、感じたりして
くれているんじゃないのかな、と思う
んですよね。自死遺児どうしが話した
ばあい」。

筆者の問いかけは、「つどい」がめざすも
の、そこで遺児どうしが出会い語ることの意
味である。それを知るために、本来は「つど
い」の仲間たちと話されるべきかれらの苦し
い気持ちを、請うて訊いた。

N君「自分のせいになりました。(間)、あ
のう、病気や災害は、自分の意思とは
まったく関係なく、天に召されるわけ
ですよね。自殺というのは自分の意思
でみずから人生を否定して、命を絶つ
行為じゃないですか。そこで、(間)、
また、もしかしたら、お父さんの子ど
もだから僕も自殺しちゃうんじゃない
か、という恐怖のようなものが、たぶ
ん、どっかしら心の奥底に恐怖みたい
なものが〔ある〕。

／病気は、いつなるか分からない、反
面、まあ怖いんですけど、自殺ももし
かしたら、…今だって〔窓を指しなが
ら〕ふつうにできるっていうか。ほん
と、いついかなる時、何が起こるか分
からないという恐怖もたぶん、心に、
こう、住みついちゃってるんですよ。
もしかしたらそれでお母さんもいなく
なっちゃうかも、とか。

／なんで人って死んじゃうのか、今ま
で生きてきた意味はなあに？ なんで
今までの人生を否定するの？ で、僕
は生きていて意味があるの？ お父さ
んを助けられなかったのに、…って
いう。どんどんマイナス思考の方にい
てしまうと思うんですよね。

／自死遺児が何人か集まったとして、
それを共有できるだけでも大きな違い
だと思うんですよ。やっぱ人は、独り
じゃ生きていけないですよ。〔けれ
ど自死遺児たちは〕、たぶん日本全国
でみてもほんの、点在して、その地
域に一人か二人くらいしかいない。そ
の子たちが集まったときに、あれ、な
んだ、俺、一人じゃないんじゃないん
だ、というのが、とりあえず、自死遺児が自分た
ち〔どうし〕で話すときの、意味だと
思うんですね」。

筆者、自分一人だと思っていたのはなぜで
すか。N君「他人と違うから」。では、一人
じゃないと思うとは。「あのう、ある意味バ
ガボンド的、宮本武蔵的な、あれじゃないで
すか。鬼の子、宮本村の恥だとかってやられ
てたわけじゃないですか。ふん、どうせ俺は
違う。誰も俺を人間として扱ってくれなかつ
た。けど、お通さんがそこに一人いた、わけ
じゃないですか。お通さんに武蔵は、つらく

なれば会いたいって、人知れず涙を流していたわけじゃないですか。あ、なにを言いたいんだろう(笑)。そこんとこだと思うんですよ。え。(問)、人ってみんな、さみしがりやなんですかね。(問)」¹¹⁾。

筆者、では、あらためて訊きます。自死遺児のさみしさとは、なんですか。

N君「(問)、『僕のお父さん自殺で亡くなりました』と〔誰かに〕言われたとして、トッキーさん、〔その人から〕目をそらしますって〔言いましたね〕。(問)、僕の、〇〇ナオトの人生は〇〇ナオキという僕の父親の人生を、そのまま後を受け継いでいくわけじゃないですか。かぶってる〔時間的に重なっている〕部分がありますよね。もっともっと長くかぶるはずだったのにもかかわらず、僕のお父ちゃんはこの辺でパッと消えてしまう。その時点で、〇〇ナオトという人生に、父親が自殺で亡くなったという、ものが、ガン！と釘でさされてしまうんですよ。たとえばお父さんが亡くなったとしても、〇〇の看板を僕は背負わなきゃいけないんです。△だったら△の看板を、背負って生きていかなきゃいけないし、□だったら□、◎だったら◎の。自分たちの看板はとりあえずガン！って背負って。お父さんが衰弱で亡くなってから看板を背負うのではなくて、いつの間にか若い頃に〇〇の看板をガン！と背負わされて、生きていかなきゃいけないわけですよ。…その時点で、(問)、まあ、病気で亡くなったというより、…は、自殺というふうに言われたら、(問)、自殺というふうに言われたら、(問)、やっぱりみなさん白い

目で、感情的になって白い目で見える方が大多数だと思うんですよ。〇〇ナオトという個人を見ないで、その人生の経歴を見て、父親が自殺で死亡。もう、たぶんその一点はまずバン！って入ってくると思うんですよ、どの方も。

／それで、ああこの人は自殺でお父さん亡くなったんだ。まあ、最近の若い人はどうだか分からないですけど、とりあえず昔の人たちつつうのは、あ、お父さんが亡くなったの。じゃあこの子はちょっと、どっか歪んでるね、的なとらえ方がまずあったと思うんですよ。

／〔実際に〕僕、就職試験で言われたんですけど。思春期の時にお父さんを亡くして、それでもよく君はそうやって、歪まずにここまで来たね。と、一言、言われたんですよ。…ああやっぱり。平和ぼけとかいうか、団塊の世代の人たちにとって、父の死というのは、どっか、その息子の人生を歪ませる原因の一つになるんだろうな。そういうとらえ方をしてるんだろうな、と思うんですよ。そういう視線ばかり浴びてたら、やっぱりどっかで歪みたくなくなりますよ。自殺だからという問題ではなくって」。

自死遺児のだれもがみな、おなじ思いというのではない。けれど、さまざまな思いを背景として、かれらのなかに「つどい」の仲間との、あるいは自死遺児どうしの出会いを意義ぶかくみる者が少なくないのは、確かなことである。

たほう、高校3年生になったCさんは、二度目の「つどい」に参加する。

Cさん「〔前略、去年の「つどい」では、ここは私の居場所じゃないと思った〕。で、次の年も行きたくなかったんだけど、なりゆきで行ったんだけど。そして、ナオ〔当時大学2年生だった自死遺児〕っているじゃん、ナオがシニア〔リーダー〕だったの。で、衝撃の出会いをしたわけだよ。ナオが最初に自分史を話してくれたの。シニアって「自分を語ろう」プログラムの構成上〕いつも最後に話すじゃん。その班〔の大学生リーダーたちのなかで〕はナオだけだったのかな、自死遺児が。たぶんそれで最初に話したんだと思うんだけど。で、ああ、と思って。なんていうか、安心した、みたいな。ここにいていいんだ、と。なんだろうね、自分とおんなじ体験をした人と向き合うことで、自分の存在意義が、みたいな。〔筆者の表情をみて〕分かりづらい？ ま、とにかく、ここにいてもいいんだ私は、と思ったの」。

筆者、そのときの気持ちを詳しく話してほしいんだけど。Cさん「うーん、ビビって感じだった。で、ほっとしたの。なんか安心した。私のこと分かってくれる人がいたぁ、と思った」。なにも話さない前から？ 「うん、思った」。私は一人じゃない、分かってくれる人がいる。そう感じたことで、Cさん自身にどんな変化があったと思う？ 「お父さんのことを考えられるようになったね、正面から。なんだろうな、考えるのってさあ、つらいじゃない。一人じゃできないんだよね。考えるのは、自分〔がすること〕だから一人でやることなんだけどさあ。ナオと出会って、ナオと話をして、私はお父さんのこと、もっと知りたいと思ったの」。

筆者、初めての「つどい」では「私はここにいていいのかな」と感じていたと言っていました。Cさん「なんにも分かってない時は、〔お父さんは〕自分で勝手に死んでったと思ってるでしょ。だから、みんなそれで泣いてたけどさ、私はもう、ここにはいちゃいけないなと思ったわけよ」。そのきっかけともなった言葉——「死にたくて死んだのではない」——に、ナオとの出会いは、もう一つの解釈を与えたのだという。

Cさん「二年目の「つどい」のキャンプファイアーでも、GT先生は、同じことを言ったのね。〔君たちのお父さんは〕死にたくて死んだんじゃない、って。それで、自殺する人も、もしかしたら死にたくないけど死んじゃうのかもしれないって思ったのね。で、考え出したわけだよ。鬱病の本とか、ちょっと読んでみたりとかして。〔鬱病になると〕生きてることが苦痛になるみたいじゃんね。生きてることが苦痛で、それから逃れるためには、死ぬしかないじゃんね。だから、死にたいわけじゃない、わけ。苦痛から逃れたいだけ、なわけ。だからもし、死っていう道以外にも逃れる道があったらそっちを選ぶ、はずで。…だから、死にたいわけじゃなかったのかもしれないな、って思う。…いまはね。

／〔「つどい」から〕帰ってお母さんに、お父さんのことを聞きたいんだけどって言って、いろいろ聞いた。そのころからお母さんとの関係が少しずつ変わって、いまはふつうに話せるようになった」。

Cさんは、ナオと出会うまでの生活、そこ

での「つらい思い」なども話してくれた。高校を卒業してからの彼女しか知らない筆者には、想像もつかなかった。いまはお母さんとも一緒にいて、お父さんのことも話すし、変わったね。「いろんな人と出会って、少しずつ、こう、ああ話してもいいんだな、って思えるようになって。〔父親の他界やその後の経験を〕話してもさ、みんな〔私を〕嫌いになったりとかしないじゃん。…ってことが分かったわけ、あしなが〔の活動〕で。自分自身〔と〕も向き合えるようになって。…それは、一言でいえばナオがいてくれたからなんだけど」。どんなふうによ？ 「(間)、別に何かをしてくれたわけじゃなくて、ただ私の話を聞いて、自分の話をしてくれただけなんだけど。たったそれだけのことが私にはすごく大きくて。話してもいいんだって思えるようになったし、一人じゃないんだって思えるようになったし。どっかにそういう、分かってくれる人がいるっていうので、いまの私はすごい強いな、と思うね」。

筆者、「強い」とは？ 「いまは別に連絡とってるわけじゃないけど、でもなんだろう、ナオがいるっていうのは、存在してるっていう、そういうことで。別に、そばにいたりとかじゃなくて、ナオが存在してる、そのことが私の支えになってる。それだけのことなんだけど。いるっていう、なんかあたりまえのことなんだけど。それが私の、すごい、いまの支えになってるね」。「支え」とは？ 「たとえば、お父さんのことを考えるときに。あんまりすごい考えると、崩れそうになるから、ちょっと考えるのやめちゃうおっかなあと思うんだけど、でも、考えて考えてしんどくなってもナオがいるから大丈夫っていう、そういうの。〔中略〕つらくなったら支えてくれるっていう。ナオがいるから、ナオが支えてくれるから大丈夫っていう。そういう安心感だね、

存在する、してるからっていうのはね」¹²⁾。

おなじ体験をした者どうしの、繋がりのようなもの。それがきっかけになり、またそれを支えにして、Cさんは話し、聞き、考えはじめた。さらに一年が経ち、01年の夏。彼女はリーダーとして高校奨学生「つどい」に参加する。

Cさん「「つどい」の自分史〔語りの時間〕って、〔進行上の工夫から〕最初に話すリーダーと途中で話すリーダーがいるじゃない。私、自分で一番最初に話したいって言ったんだ。自死遺児〔のいる〕班で、その場にいた自死遺児の子は初めてだったの、「つどい」が。だから私みたいにさ、誰にも話したことなく、独りぼっちだと思って、きつと。私がナオの話を聞いたときに感じたみたいな安心感を与えてあげたかった。そう思って話した。おなじ体験をした人じゃなきゃ分かんないものがある、でしょ。それはすごい、大きいじゃん。自分のことを理解してくれる人がいないと、人間はすごく孤独じゃない？」。

彼女は、一人きりでない。筆者にはそれが幾通りにも理解された。ナオをはじめ「つらいのは私だけじゃなかったんだ」と気づかせてくれた「つどい」の仲間たち。安心させてあげたいと思う後輩たち。なにより印象的なのは、Cさんが、かれらをとおして過去の、「独りぼっち」だったころの彼女自身と対話していることである。

その年、01年は東京、福岡、佐賀などで、遺児にかんするシンポジウムが開催されていた。9月の秋田シンポジウムには、あわせて自死遺児ミーティングの場がもうけられ、C

さんもこれに参加している。「私はね、高校生のときから、自死遺児だけのつどいがあればいいのになって思ってたのね。だから、それは、もう絶対行きたいと思って」。

筆者、自死遺児だけの集まりは居心地がいいものなのか。Cさん「うん、いい」。それは「安心感」だ、とも。別の機会にくわしく紹介したいが、おなじような言葉を筆者は何度も聞いている。かつて交通遺児奨学生だった40歳代の女性は、交通事故で父親を、夫を亡くしたと聞けばあとは「もう、なにも言葉はいらない」と言った。ある病氣遺児は、父親の病氣が、ましてガンの部位が同じと聞けば、特別な気持ちになると言った。そのことをCさんに話すと。「そりゃあやっぱり、考えたことが似てるからじゃない？ その人が死ぬ前に。死んだ後のこともたぶん。自分がなにを感じて、考えたかが一致してる部分が多いから、なんにも言わなくてもっていうのがあるんじゃないかな」。それは秋田でも思うことだった？ 「思うことだったね」。

Cさんにとって、自死遺児ミーティングのよかった点はなにだろうか。Cさん「ふつうの「つどい」のなかの自死遺児の人との出会って、だいたい一人か二人しかいないじゃん。みんなが自死遺児だとさあ、すごい昔に親を亡くした人もいて、ちっちゃい頃に亡くした人もいて、大きくなってから亡くした人もいて、最近亡くした人もいて。考えることができてる人もいれば、まだ全然、向き合えてない人もいて。なんだろうな、その人たちの話を聞くことによって、自分のことも考え、自分はどうだろうって思えて…。自分を、すごく見つめられる」。

自死遺児ミーティングはすでに、「社会を変える第一歩に」（はじめに）との思いをこめて文集『自殺って言えない』を発刊していた。Cさんも「いま日本にいっぱいいる遺児

のために、自分とおなじ思いをさせたくないから、ケアハウスを建てたい」と訴えて募金活動に参加している。街頭募金では自分の経験をどのように話すのか、と訊いた。「それはねえ、言えなかった、こないだ言おうとして。…なんていうんだろ、客観的にしか言えなくて、主観的に言えなくて。どうしてもつまっちゃって言えなくて。へこんで。じゃあ明日は言おうと思って、言えなくて、へこんで、のくり返しだった」。街頭で見知らぬ人びとに言うことは、よほどの覚悟がいるだろう。筆者、ふつうは言えないと思うよ。なぜへこむの？ 「言おうと思って、ちゃんと考えて、言葉とかも。なのに、そこまできたときにどうしても声が出なくて、違うところにとんじゃって。あ、なにやってんだ私、と思った」。じゃあ、言えなかったのはどうしてだと思う？ 「どうしてだろう。(間)、聞こうとしている姿勢をもってない人に言うのがこわかったんだけど。(間)、受けとめてもらえないじゃん。だから、(間)、受けとめてもらえないのに話すっていうことが、すごくこわくて、止まってしまった」。

でも言いたい。Cさんはくり返した。それはなぜか、と訊いた。「募金で、お金集めるだけじゃなくってさ、世間に理解してもらいたいわけじゃん。世の中には、自殺で親を亡くした子どもが苦しんでる、なんて考えたこともない人がいっぱいいるはずじゃん。だから少しでも分かってほしいと思う」、と彼女は答えた。

かれらは「自殺防止の提言」をもって、総理大臣にも会っている。小泉さんのところはどうだった？ 「すごい、おもしろかったの(笑)。首相官邸に入るところとか、そんなことはどうでもいい？(笑)」。国会議事堂は社会見学で行くけど、首相官邸には行かないよね。「行かないよねー、(笑)。絨毯ふわふわ

だった。福田官房長官がいた(笑)。でもま、首相に会って大きい動きは、たしかにあったね、それは、政府が動いたってことじゃなくて。ま、政府も動いたんだけどさ、厚生労働省の自殺防止に関する有識者懇談会、具体的にそれだけなんだけど、じつはそこ〔首相官邸〕に行くことによってさ、すごい注目度だったじゃんねえ。入った瞬間さあ、すごいよ。報道陣とか、がぁっていて、フラッシュがぁって…。なにになになに、とか思って。いつもの2社とか3社しか取材に来てない状況を想像してたら、まあびっくりしてね。それがきっかけとなってどんどん、テレビの放送があったり、いろんなところから注目が集まって、世間の人たちはそれを見てさ、見ましたよとかいって募金してくれたりとかして。そういう効果の方が大きかったね、政府が動いたことよりも」。

そのような場で実名を公表することに抵抗はなかったのか。「私は最初から、そういうのは抵抗がなかった、ぜんぜん。だから首相官邸行くけど、報道陣来るから、顔とか大丈夫？ って訊かれたときにもぜんぜんOKって感じだったし。名前も出すよって言われても、私は別にいいと思って。ニュースでさ、流れるじゃん、首相官邸で〔自死遺児たちが提言〕とか、地元のローカルとかで。で、見たよーとかって言うてるじゃんね、友だちとかも。〔それにも〕別に、あ、そうなんだ〔と応答する〕、ぐらいで」。

インタビューの全体を綜じる目的も込めて訊いた。お父さんにたいする気持ちと、いまやっている活動との関係は、どのようなものだろうか。Cさん「(長い間)、ないね、たぶん。(間)、ないね」。意外に聞こえて筆者はつづけた。自分が言うことで、自殺を思いとどまってくれる人がいるかもしれないとは思わないか。

Cさん「(間)、二つ考えがあるわけ、私のなかで。両極端な、ね。もしも子どもももってる人が自殺しようとしてて、うちの声を聞いたら、…子どものために、ああやめなきゃって思うと思うのね。がんばって生きていってくれるかな、って思うわけ。でも逆に、死ぬってことも一つの選択だと思うわけ。だから、自分が死んで悲しむ人のために自殺を思いとどまったとしても、それは、自分の人生じゃないんじゃないかなって思うわけ。自分が死んだら悲しむ人のために生きてることになっちゃうかな、って思うのね。でもま、それはそうやって生きているなかで、自分のためについていうものを見いださなければいいから、それはそれでいいのなかあって思うんだけど。…うんうんうん、(間)。だからって自殺を肯定するわけじゃないしね。自殺はしてほしくないし、(間)。むずかしい…」。

筆者、じゃあ、お母さんについての気持ちは？

Cさん「(即答して) あるある、お母さんにたいしては、ある。お母さんにたいしてっていうか、遺族にたいして、っていうか。自分のお母さんにたいしてと、他の、世間にいる遺族にたいしての思いがリンクしているな、とは思うね。私もいま愛してる人〔恋人〕がいるから思うけど、その人が自殺なんてしたら、ほんとに、ほんとに耐えられないじゃんね。そんなこと、うちのお母さん、経験してるわけじゃんね。それって、ほんとに、私よりつらいんじゃないな

いかと思うわけ。っていうか、あたりまえ、私よりつらいだろうけどさ。でさ、それをさ、あしながっていう場もなく、一人で抱え込んでる人もいてさ。子ども育てるためにがむしゃらに働いて、自殺なんて世間の人に言えなくて、みたいな。そういう人たちも楽になってほしいと思うから、〔街頭募金などで〕活動してる〕。

インタビューをおえて帰りぎわ、Cさんは恋人との大切な“ナイショ話”を少し、聞かせてくれた。死別の体験やつらい心情も互いに話し、聴きあうのだ、と。だからこそ、とつぶつけて言った。「〔二人は〕お互い分かりあえる。〔二人ともに〕変えなきゃいけないところもあるわけよ。〔それらを〕『根本は家庭環境にあるかな〔と了解した上で〕。お互い時間かけて直していこうね』っていうふうに、分かりあえるのね」。

Cさんが母親や恋人のことを話したときのいくつかの表情、またその変化は、筆者に印象ぶかく残っている。

以下、本誌次号に投稿予定。

註

- 1) インタビューの実施時期は、2002年3月、8月、9月。場所は、遺児たちの「つどい」会場、あしなが育英会事務所、遺児自宅。いずれもテープ録音により記録した。
- 2) あしなが運動の経緯については、副田義也『あしなが運動と玉井義臣』岩波書店、2003年に詳しい。また以下の作文は、玉井義臣(編)『あしながおじさん物語』サイマル出版会、1985年より引用。
- 3) 活動の経緯は、自死遺児編集委員会・あしなが育英会(編)『自殺って言えなかった。』サンマーク出版、2002年、245-246頁にまとめられている。
- 4) この「アンケート」によって得られたデータの

集計結果は、その一部が次の論考に紹介されている。副田義也「自死遺児について・再考」『母子研究』No.22, 社会福祉研究所, 2002年, 21-37頁。

- 5) なお、病氣遺児の体験や心情については、あしなが育英会(編)『お父さんがいるって嘘ついた』廣済堂、1997年を参照されたい。
- 6) 自死遺族当事者の経験については、高橋祥友『自殺、そして遺された人々』新興医学出版社、2003年、グリーンケア・サポートプラザ(編)『自ら逝ったあなた、遺された私』朝日新聞社、2004年などに詳しく紹介されている。
- 7) 遺児たちの自分史語りの時間については、拙稿「言わないという不快、話せるという安堵——遺児の語りあう経験から——」『社会学ジャーナル』第28号、筑波大学社会学研究室、2003年、113-124頁に概要を示した。
- 8) 上級生リーダーによる“問いかけ”については、拙稿「分かちあいの会で語りを『聴く』作業について——遺児たちの『自分史語り』のばあい——」『金城学院大学論集』第3巻第2号、2007年、44-65頁に詳説した。
- 9) いろいろの経験をもつ遺児たちが出会い、語りあって醸成される心情については、拙稿「故人をめぐる対話——子どもたちによる“分かちあいの会”のばあい——」『年報筑波社会学』第15号、筑波社会学会、2003年、82-93を参照されたい。
- 10) 自死遺児たちの体験や心情は、自死遺児編集委員会・あしなが育英会(編)、前掲書に詳しい。続けてN君の言ったエピソードは、本書にも紹介されている。
- 11) N君の言う『バガボン』とは、宮本武蔵の生涯を描いた漫画作品である。吉川英治原作、井上雅彦作『バガボン』1~25巻、講談社、1999-2007年(未完)。
- 12) 互いに聴き、話した記憶が「支え」になるといった心情については、拙稿『当事者グループ』経験の諸過程——遺児たちの『つどい』に取材して——』『社会学ジャーナル』第29号、筑波大学社会学研究室、2004年、199-217頁に詳しく述べた。